理学療法士における自己効力感と自己調整学習の特徴

Characteristics of Self-efficacy and Self-regulated Learning in Physical Therapists

高島 恵^{1,2)} 堀本 ゆかり³⁾

MEGUMI TAKASHIMA, RPT, MS^{1,2)}, YUKARI HORIMOTO, RPT, PhD³⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, Ageo Chuo Medical College: 678-1 Hiratsuka, Ageo-shi, Saitama 362-0011, Japan
TEL +81 48-778-3232 E-mail: m_takashima@acmc.ac.jp

²⁾ Department of Health and Medical Science, Graduate School of Medical and Welfare, International University of Health and Welfare

³⁾ Graduate School of International University of Health and Welfare

Rigakuryoho Kagaku 35(5): 603–606, 2020. Submitted Mar. 21, 2020. Accepted Apr. 30, 2020.

ABSTRACT: [Purpose] The purpose of this study was to clarify the characteristics of self-efficacy and self-regulated learning in physical therapists. [Participants and Methods] The subjects were 52 physical therapists with at least 6 years of experience. Questionnaire surveys were conducted using items of the Japanese version of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ) Motivation Scale and the General Self-Efficacy Scale (GSES). For the analysis, the respondents were divided into two groups according to their GSES level, and a test for the difference in MSLQ was performed. [Results] The MSLQ items that differed between the two groups were 10 out of 31 items, and test anxiety was strong only in the group with low self-efficacy. [Conclusion] Reducing test anxiety may be one way of promoting self-regulated learning.

Key words: physiotherapist, self-efficacy, self-regulated learning

要旨:〔目的〕本研究の目的は、理学療法士における自己効力感と自己調整学習の特徴を明らかにすることである。〔対象と方法〕対象は、経験年数6年以上の理学療法士52名とした。調査項目は、日本語版MSLQの動機づけ尺度(MSLQ)および、一般性セルフ・エフィカシー尺度(GSES)とし、アンケート調査を実施した。解析方法は、GSESの高低により2群に分け、MSLQの差について検定を実施した。〔結果〕2群間で差のあったMSLQ項目は31項目中10項目あり、自己効力感の低い群のみテスト不安が強かった。〔結語〕テスト不安を軽減することが自己調整学習を促進させる手掛かりとなる可能性が考えられた。

キーワード: 理学療法士, 自己効力感, 自己調整学習

¹⁾ 上尾中央医療専門学校 理学療法学科: 埼玉県上尾市平塚678-1 (〒362-0011) TEL 048-778-3232

²⁾ 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻

³⁾ 国際医療福祉大学大学院

I. はじめに

「人生 100 年時代」の到来から、「人生 100 年時代構想会議」を中心に「社会人のリカレント教育推進」が提唱されている¹⁾。また中央教育審議会答申における育成人材像においても、高度な専門性に加え「生涯にわたり学び続ける能力」が求められている²⁾。なかでも理学療法士のような専門性を有する職種においては、その特性に応じた能力を最新に保つためにも、絶えず学び直しが必要である。さらに、公益社団法人日本理学療法士協会の「理学療法学教育モデル・コア・カリキュラム」における理学療法士として求められる基本的な資質・能力の一つに「生涯学習の励行」があり、ここでは「理学療法専門職として理学療法の質の向上のために絶えず省察し、他の連携協働するすべての人々と共に研鑽しながら、生涯にわたって学び続けることの意味を理解すること」が目標として掲げられている³⁾。加えて、理学療法の質の向上のため絶えず省察するという点においては、自らの活動をモニタリングしコントロールするメタ認知的活動が重要となる。このメタ認知の観点から自律的学習の形成を捉えているという点において、自己調整学習の概念が理学療法士の生涯学習を考えるうえで適ししやすいモデルと考え、「学び続ける能力」の一つとして自己調整学習に着目した。

自己調整学習は「学習目標の達成に向けて、自らの行動や思考を組織的に適用していくような学習」と定義されており⁴⁾、予見、遂行制御、自己省察の3段階による循環的性質からなる。また社会的認知理論の枠組みによれば自己調整は場面限定的なものであり、きわめて文脈依存的なものとされている。このなかで学習者にとって必要なことは、自己調整過程を特定の分野に適用する方法を学ぶことと、そのことができそうであるという自信のようなものを感じることでありとされている⁴⁾。

この「できそうであるという自信のようなもの」すなわち「自己効力感」は、Bandura³⁾によると「一定のレベルの行動を遂行したり獲得したりする能力に関する信念」とされており、課題選択、持続性、努力、達成といった活動に自己効力が影響を及ぼしていることが先行研究で明らかにされている。また学習における自己効力感についての先行研究では、学業達成において、自己調整学習方略の使用が直接的な規定因子になっており、自己効力感が自己調整学習方略の使用に対して促進的な役割を果たしていることが複数の研究者により明らかにされている⁵⁾。

このように、先行研究においては自己効力感や自己調整学習と成績などの関係性や特徴について様々な報告があるが、社会人の報告は少なく、なかでも理学療法という文脈における自己調整過程と自己効力感の関係性や、自己効力感の高低による自己調整学習の特徴などに言及

する報告は見当たらない。

これらを明確にすることによって、自己調整学習を十分に機能させるための手掛かりとなることを期待し、本研究では理学療法士の自己効力感と自己調整学習の特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 対象と方法

1. 対象

関連医療法人グループにおける経験年数6年目以上（一般的な業務を自立して実施できる者）の理学療法士52名（年齢：33.7 ± 5.6歳、性別：男35名・女17名、経験年数10.2 ± 3.8年：平均 ± 標準偏差）とした。

2. 方法

調査項目と内容は、自己調整学習尺度については宮部ら⁶⁾の「日本語版MSLQの動機づけ尺度（Motivated Strategies for Learning Questionnaire：以下、MSLQ）」を用いた。学習の動機づけに関する31項目の質問に対して、「非常にあてはまる」を7、「全く当てはまらない」を1の7件法にて回答する。自己効力感については坂野ら⁷⁾による「一般性セルフ・エフィカシー尺度（General Self-Efficacy Scale：以下、GSES）」を用いた。自己効力感に関する16項目の質問に対して、あてはまる場合はYes、あてはまらない場合はNoの2件法にて回答する。いずれの項目も調査はwebアンケートにて実施した。電子メールにて本研究に関する説明書ならびに調査項目にアクセスするインターネットアドレスを添付し、回答をもって同意とした。本研究は上尾中央医療専門学校倫理規定に従い、倫理委員会の承認（承認番号：17-0005）を得て実施した。

解析方法はGSESを変数化（Yes=1, No=2, 反転項目は変数を反転）し、自己効力感の高低により2群に分け、MSLQの差について2標本t検定またはMann-Whitney検定にて確認した。統計処理はR2.8.1を使用し、有意水準は5%とした。

III. 結果

結果をもとに、自己効力感の高い群（GSES 1.50以下：以下、A群）と自己効力感の低い群（GSES 1.51以上：以下、B群）の群に分けた結果を表1に示す。

MSLQの結果のうち、2群間に差のあった項目は31項目中10項目あり（表2）、特徴ごとに3つの群に分けることができた。1つ目は、両群とも高い値を示している群（項目番号4, 16, 17, 23の4項目）であり、それらの特徴は内容への興味関心や学習内容の活用などの「内発的価値」に関するものであった。2つ目はB群が高くA群が低い値を示している群（項目番号8, 14,

19, 28 の 4 項目) であり, それらの特徴は「テスト不安」に関するものであった。3 つ目は, A 群は中間の値を示し B 群のみ低い値を示している群 (項目番号 21, 31 の 2 項目) であり, それらの特徴は「授業に対する自己効力感」に関するものであった。

IV. 考 察

結果から, 学ぶ内容に対する興味関心や学習内容の活用などの内発的価値は両群とも高いが, 自己効力感が高い群ではテスト不安が弱く, 自己効力感が低い群では授業に対する自己効力感も低くテスト不安が強いという特徴が認められた。

テスト不安の項目は本尺度では 5 項目あり, 本調査ではそのうちの 4 項目に差のある結果となった。原版の MSLQ⁸⁾ においては, 中学生を対象に調査した結果「テスト不安」に関する点数が最も低く, 「学習や成績に対する自己効力感」と「テスト不安」との弱い負の相関が認められている。また藤井ら⁹⁾によると, 大学生の知能観の潜在的測度である Implicit Association Test (IAT) とテスト不安との間に負の相関が認められており, 潜在的知能観が増大的であるほどテスト不安が低く, 潜在的知能観が実体的であるほどテスト不安が高かった。

Dweck ら¹⁰⁾によると, 増大的知能観とは「知能は柔

軟なもので, 自身の努力によって成長させることが可能」という考えで, この知能観を持つ者にとっての困難の知覚や失敗経験は, 問題解決のためにこれまでとは異なる対処が必要であるという認識となり, 問題解決に動機づけられネガティブな感情は生じにくい。一方, 実体的知能観とは「知能の量は固定的で, 自分自身での制御は困難」という考えで, この知能観を持つ者にとっての困難の知覚や失敗経験は, 自身の能力の低さを周囲に露呈したという認識となり, ネガティブな感情が生じやすい。また, 失敗の原因を自身の能力の低さに帰属する傾向があり, 後続する課題への動機づけが低下し回避的になる, とされている。

今回の調査対象に対し, 調査結果とともにこのような概念を伝えることによって, 自己の潜在的知能観に関する振り返りを通して, テスト不安に関して何らかの気づきが生まれる可能性があると考えた。他にも, 理由が明確なテスト不安に対しては学習活動等によって不安を解消するなど, 何らかの形で不安を軽減することで, もともと持ち合わせている学習内容への内発的価値が顕在化し, 自己調整学習を促進する可能性があると考えた。

今回の調査対象は経験年数の平均が約 10 年であったが, そのような年代においてもテスト不安が影響力を持つことが明確になった。テスト不安を軽減させることが自己調整学習を十分に機能させるための手掛かりとなる可能性が示唆されたが, テスト不安とその他項目の因果関係については今後の課題とする。

利益相反 研究に当たり開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

表 1 各群の n 数, 性別, 経験年数

	A 群 (GSES : 1.50 以下)	B 群 (GSES : 1.51 以上)
n	24	28
性別	男 : 19, 女 : 5	男 : 16, 女 : 12
経験年数 (年)	10.7 ± 3.9	10.8 ± 4.1

平均値 ± 標準偏差。GSES : General Self-Efficacy Scale.

表 2 MSLQ のうち, 差のある 10 項目の結果

設問番号と内容	A 群 MSLQ	B 群 MSLQ	
4 : 授業での学習を他の授業で活用できると思う	5.8 ± 1.0	5.3 ± 1.0	*
8 : テストを受けるとき答えられない項目について考え込んでしまう	3.7 ± 1.6	4.9 ± 1.2	**
14 : テストを受けるときよくない結果のことを考えてしまう	2.8 ± 1.3	4.4 ± 1.7	**
16 : 授業では, たとえ学習が難しくても, 好奇心をかきたてるような資料を好む	6.1 ± 0.9	5.4 ± 1.0	*
17 : 授業内容にとっても興味がある	5.5 ± 1.1	5.0 ± 1.0	*
19 : テストを受けるとき不安や動揺を感じる	4.0 ± 1.6	5.0 ± 1.6	*
21 : 授業でうまくやれると信じている	4.4 ± 1.3	3.0 ± 1.1	**
23 : 授業資料は自分の学習に役立つと思う	5.8 ± 0.9	5.2 ± 0.9	**
28 : テストを受けるとき心臓の鼓動が速くなるを感じる	2.7 ± 1.8	4.1 ± 1.5	**
31 : 授業の難しさや教員, 自分のスキルを考えると, 授業でうまくやれると思う	4.4 ± 1.0	3.4 ± 1.2	**

平均値 ± 標準偏差。MSLQ : 日本語版 MSLQ の動機づけ尺度。* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$ 。

引用文献

- 1) 内閣官房内閣広報室：人づくり革命 基本構想（平成30年6月）。<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinsei100nen/pdf/torimatome.pdf>（閲覧日2019年9月23日）。
- 2) 文部科学省：社会・経済の変化に伴う人材需要に即応した質の高い 専門職業人養成のための新たな高等教育機関の制度化について（平成28年3月）。https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/038/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/04/25/1369683_02.pdf（閲覧日2020年2月28日）。
- 3) 公益社団法人日本理学療法士協会：理学療法教育モデル・コア・カリキュラム。http://www.japanpt.or.jp/upload/japanpt/obj/files/about/modelcorecurriculum_2019.pdf（閲覧日2020年4月26日）。
- 4) バリー・J・ジーママン, デイル・H・シャンク：自己調整学習の理論。北大路出版, 京都, 2006, pp119-144.
- 5) 伊藤崇達：自己調整学習の成立過程。北大路出版, 京都, 2009, pp13-15.
- 6) 宮部明美, 富樫千秋, 佐久間夕美子・他：日本語版MSLQ (Motivation Scales) の信頼性と妥当性の検討。日本健康医学雑誌, 2016, 12: 276-286.
- 7) 坂野雄二, 東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み。行動療法研究, 1986, 12: 73-82.
- 8) Pintrich PR, De Groot EV: Motivational and self-regulated learning components of classroom academic performance. J Educ Psychol, 1990, 82: 33-40.
- 9) 藤井 勉, 上淵 寿：潜在連合テストを用いた暗黙の知能感の査定と信頼性・妥当性の検討。教育心理学研究, 2010, 58: 263-274.
- 10) Dweck CS, Leggett EL: A social-cognitive approach to motivation and personality. Psychol Rev, 1988, 95: 256-273.